

北原翔希の野球人生

神戸のモンブラン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

薬師高校の野球部は新たに轟雷蔵監督が就任。

その監督が体育のソフトボールの授業を見ていると。。。

目次

第0試合	1
第1試合	4
第2試合	8
第3試合	12
第4試合	17
第5試合	20
第7試合	23
第8試合	26
第9試合	29
第10試合	31
第11試合	33
第12試合	36
第13試合	39

第0試合

東京都内とある高校の職員室で1人の教師が思い詰めた顔をしていた。

「轟監督。どうですか？野球部は」

「あつ…教頭先生…いやー最近の子は難しいですね私も来年高校生になる子供がいますが気難しいやつで…」

この高校ーー

薬師高校の野球部監督を今年から務める轟雷蔵とどろきらいぞうは教頭の問いへ苦笑いを浮かべながらそう返答した。

(言えねえ…3年生の部員が全員辞めたなんて…！)

――
遡ること1週間前。

「お前らはなんのために高校に入ってまで野球をやってる？」

「はあ…」

薬師高校野球部の監督になり最初の挨拶で部員達にそう問いかけた。

何となくやっている、という如何にも普通の高校の回答が帰ってきた。

「お前らせっかく野球部でやってんだ！甲子園目指そうぜ！」

「プレーすんのはテメエらだ！俺を甲子園に連れていけ！」

そう部員をやる気にさせた所までは良かった。

しかし俺が用意したメニューをロクにこなせない。挙句の果てに3年生の部員はこれなら受験勉強に勤しむと全員辞めてしまった。

――
(クッソ…まあやる気のないやつはいずれ辞める。しかしせっかく職に就いたのにここで結果残せねーとまた無職になっちゃう)

1度気持ちを落ち着かせるために外の空気を吸いに外へ出た。

グラウンドではどうやら1年が体育のソフトボールをしている。
野球部のメンバーも何人かいた。

「あつ監督ちわす!」

「おう森山、次のバッターか?」

野球部の森山もりやま誠まことがどうやら次のバッターだ。

ピッチャーが下手投げで放った緩いボールを森山は思いっきり引っ張った。

鋭いゴロが三遊間のややショート側を破ろうする。

(ショートの見せ場だな。まあ経験者じゃねーと難しいだろうな)

そう思っているとショートを守っている奴は逆シングルでボールを捕球。そして一塁へワンバウンド送球。

森山の方が送球より早く一塁へ到達しておりセーフだった。

思わず目を見開いた。

(あいつ、、、かなり上手い。1歩目が左足から出ている足の運び方。捕ってから投げるまでの一連の流れ。かなり高度な指導を受けているはず。)

体育の授業が終わり各々教室に戻る生徒の中のショートを守っていた者に声を掛けた。

「さっきのソフトボール見てたよ。森山の三遊間のゴロの足の運び方から何まで完璧だったよ。どこかで野球やってたのか?」

「まあそれなりには」

ショートを守っていた生徒はぶつきらぼうにそう答えた。こんな逸材この高校に落ちているなんてな。

よしそうと決まれば――

「なあ野球部に入ってみないか?」

「俺もう野球やらないので」

第1試合

「あいつの名前北原きたはら 翔希しょうきつすよ。確かサッカー部つすね」

4月から入学した1年生の真田さなだ 俊平しゅんぺいはそう答えた。

「サッカー部だー？元々野球やってねーのかあいつ」

「確か中学までやってたって言ってたような言ってなかったような」

「なんだあ、随分中途半端な言い方じゃねーか」

「いやそれが中学の部活はサッカー部だって言ってましたからおかしいなと」

(中学までは野球をしてて部活はサッカー部って変な話だな)

それ以上は知らないという真田に礼を言い雷蔵はあるファイルを取りだし少し調べ物を済ますと、とあるところに電話をかけた。

—————

雷蔵がとあるところに電話をかけてから数日。翔希はいつものように屋上で昼休みで昼食を済ませうたた寝をしつつ過ごしていた。

「おおーお前こんなところにいたのか探したぜ」

「…探してたって俺の事をつすか？」

まさか自分のことを探しているとは思っていなかった翔希は寝転んでいた体制から起き上がり素直に疑問をぶつけた。

「この前も野球部の話は断りましたよね…」

「まあ気にすんな。お前のことについて調べがついたんだよ。早川さんに聞いてな。1年から難波シニアで投手としてマウンドに上がっていたけどお前最後の1年間ずっとベンチ外だったらしいな」

「それをなんで轟先生が？」

「早川さんとは昔社会人野球で同じチームメイトでな。お前が大阪出身ってのは聞いてたしなんか知らねーかなと思って聞いたらこれがビンゴだったわけよ」

まさか自分の過去について調べているなど思いもせずただ啞然としていた翔希も雷蔵に何があったかは翔希に直接聞けと早川さんに言われたと伝えると観念するように口を開いた。

「2年になった時に早川さんが辞めて新しい監督になった。俺の同級生が早川さんの跡を継いだ監督の息子。つまり鼻屑つてやつ。監督からしたら息子のエースナンバーを奪う俺が憎かったと思う。たまたに練習試合とかもでてたけど結果残しちまうと反発の声上がる。だからおれは中2の夏からずっと球拾い」

「まあ怪我とかでなけりやそういうもんだろうな。汚い大人つてもんはとことん汚い。お前のピッチングの映像何個か見たよ。おまえはいいピッチャーだよ。そんな良いピッチャーのお前に見てもらいたいもんがある。放課後ちよつと付き合ってくれ」

――
日が落ち始め気温が下がり始めた頃、翔希と雷蔵はある河川敷に来

ていた。

「こいつらは来年の春からうちの野球部に入る奴らだ。右から秋葉、ミッシーマ、俺の息子雷市だ。」

「…え？推薦とかつすか」

「違う違う。秋葉とミッシーマはガキの頃から目付けた奴らだ。ここら辺では無名だよ。どうだ？こいつらとあれば甲子園も夢じゃねーだろ？」

素振りを拝見していると確かに細身の左打ちの秋葉。体格のいいミッシーマこと三島。2人とも中学3年生にしてはかなりいいスイングだ。

だがそんな2人のスイングが霞むほど鋭く早く、凶暴なスイングを繰り返す雷蔵の息子雷市。

思わず冷や汗が出てアドレナリンが出る。翔希の投手としての本能を素振り1つで刺激してしまうような雷市のスイングに翔希は甲子園が確かに夢でもない気がしてくる。

「まあ、そんなところで野球部入って力貸してくれねーか、お前がいたりホント甲子園どころか全国制覇も夢じゃないと俺は考えている。どうだ？ロマン溢れる話だろ？」

（たかが野球部に入るかどうかでなんでこんな大袈裟な話になってんだ。でもー）

この親子となら本当に叶いそうな全国制覇。そんな大きなロマンに期待せずはいられない翔希は薬師高校野球部へ入部することを決

意する。

第2試合

「えー1年5組の北原翔希です。ポジションは主にピッチャーをやっていました。よろしくお願いします」

まばらな拍手が起きそれに頭を下げる。すると雷蔵がグラウンドへとやってきた。

「自己紹介終わったみてーだな。よし！18人目の仲間が入ったし今日はてめえらの実力を見るために紅白戦やるぜ。全員にピッチャーやらせっから全員がエースのチャンスだぜ。俺にガンガンアピールしろ！」

「球種はなにがある？」

「とりあえず実践で使えるのはカーブ、スライダー、チェンジアップです」

「おっけー、じゃあストレートは、」

1回表の守りからいきなり投手としてマウンドに上がる翔希は2年生捕手の渡辺とサインの打ち合わせをしている最中だ。

「まあ嫌だったら首振ってくれたらいいし思い切って投げろよ！」

渡辺との打ち合わせの後投球練習が終わりボール回しのボールがが手元に戻り打者を見る。

初球はアウトコースの真っ直ぐのサイン。

そのサインに頷きワインドアップに入りサイン通りアウトコースへ真っ直ぐミットへ収まる。

1人1イニングずつという決まりだったがその中で翔希は1イニングを3者凡退に抑え、紅白戦ながらもまずまずの高校野球デビューを果たした。

打つ方でも、投手経験のない野手が投げたこともあり急造投手多いながら5打席全て出塁を果たした。

試合後には雷蔵は翔希、2年生の三野、真田を投手と据えこれから戦っていくとチーム内で取り決めたことを発表し新生薬師高校がスタートした。

「カーブどうやって投げてんの?」

紅白戦の帰り道、真田が翔希に話しかける。

「うーん今は捻る感じで投げてるかなあーもつと引き出し増やしたいしなあー、抜くカーブもマスターしたいなって思ってる」

「今はって……今でも十分凄いじゃん翔希のカーブ」

「おーおー言うね俊平。褒めてもなんもでねーぜ。」

「いや翔希は良いピッチャーだよほんと。これ以上凄くなって本当に何目指すんだよ」

真田の言葉には嘘やお世辞は一切なかった。現に紅白戦では3番バッターとして翔希と対峙したが強烈な実力差を感じた。

球速は真田と同じ程度だったがそのストレートがコースいっぱいになり追い込まれたあとはボールになるカーブに手を出してしまい三振を決した。

真田は同じ投手として翔希との実力差を感じたのだった。そんな投手がこの無名高校で上を目指しているからこそどうしたいのか聞きたかった。

「うーん甲子園かなあ今は」

「え？甲子園？この高校で？甲子園いくなら他の有名校とかいかなかったの？」

「うん、この高校で、最初は野球もやる気はなかったけどまあ目指すなら甲子園かなとありあえずは。何となくで3年間過ごしたくないし、なんせ野球好きだし」

「甲子園かあ考えたこと無かったなあ……けどなんか翔希とならいいそんな気がするし俺も真面目に目指してみようかな」

「まあ俊平はまず校舎裏でランニングサボらんことやな監督はバレーバレーなのになって苦笑いしてたぞ」

「ハハハ、まあその通りだな」

今まで続けてきた野球を何となく高校でもやり始めてた真田だったが1人の野球人として、1人の投手として翔希と共に甲子園を目指

してみようと誓った。

第3試合

「よーし！・てめえら今日はその辺にするぞー！片付けろー！」

練習メニューをこなしていた翔希を始めとする部員達はキョトンとした顔で雷蔵を見ていた。

それもそのはずいつもは19時頃に終わっている練習を17時に片付けろと指示したためだ。

「まあ、たまにはそんな日もあっていいんじゃないかな？とにかく片付けようぜ」

「おっ！いい声掛けだ！キャプテン流石だな！」

3年生が全員退部したため、2年生ながらキャプテンとして選ばれた山内豊がキョトンとしていた翔希達に片付けるよう促したのを見て雷蔵がサムズアップをしつつ冷やかす。

「俺あんまキャプテンって呼ばれるの慣れてないんで冷やかさないでくださいよ……」

—————

「えー今日は早く切り上げるが明日は練習試合だからな各々準備しておけよー！」

「……………」

「ん？なんだ？反応悪いなお前ら。どうした？」

「いやポジションとか結局どうするか決められてないのに急に監督が言い出したのでビックリしてると思いますよ」

キャプテンの山内がそう口を開くと、そういえばそうだなと呟く。

「まああれだ。三野と北原と真田に3イニングずつ投げてもらおうぐらいしか決めてなかったわ。まあ後は俺の方で考えるから明日のお楽しみだな。悪いな」

「あと俺は試合は楽しめがモットーだからサイン出さねえ！実際にグラウンドに立って闘ってるのはお前らだ！だから考えて楽しめ！そして勝て！以上だ！」

部員達は雷蔵の奇想天外な部分に慣れつつあったが、もう考えて突っ込むことをやめた瞬間であった。

—————

「昨日、僕たちに勝ってって監督言いましたよね」

「それがどうした？」

「向こう、普通に3年生がいて、こちらに3年生いないんですが大丈夫ですかね？」

「まあなるようになる、こんなことで簡単に負けるようなヤワな練習はさせてないぜキャプテン」

そう言われ雷蔵が顧問になってからの苦しい練習を思い出しハツとする。そうだ俺たちはいっぱい練習したんだと。

しかし試合が始まると1回表いきなり先発の三野がコントロールを乱し四球が絡み5失点してしまう。

1回表が終わり守備に戻ってくるチームの足取りは重く、悪い空気が流れる。

静かで重い空気が流れており各々水分補給などしているのを見て雷蔵は敢えて何も声はかけなかった。

(まあ確かに山内の言う通り厳しい。けどこれも経験だ。こういう空気をどうするか、チームを見極めたいからな。)

「よし！じゃあ取られた分取り返していきますか！」

そう声を出したのは1番バッターとして用意をしていた翔希だった。

「まだまだ1回ですよ！1イニング1点ずつでも9点取れますから」

その翔希の声に続いたのは真田だった。

(クソ！何1年に励まされてんだ…消去法のキャプテンだとしてもチームを盛り上げるのは俺なのに)

「よし！北原と真田の言う通りだ！どんどん打って三野を助けていこうぜ！」

その3人の声を聞き一気に盛り上げる薬師ベンチ、翔希と真田と意外な人物達が熱い性格をしていると分かったただけでも十分だなと雷蔵はそのまま視線をバッテリーボックスに入る翔希に目を向ける。

「お願いしますー！」

バッターボックスに入る前に球審に挨拶し左バッターボックスに入る。

(確かに初回到に5失点したけどこんなの野球が出来ないことより全然マシや!!)

相手チームのバッテリーが選んだ初球はアウトコースのストリート。それを翔希は狙い打ち振り抜き3塁線を破るツーベースを放つ。

その後2番の1年生増田大輝、3番の真田が連続四球であつという間にノーアウト満塁でバッターは4番の山内。

山内は初球ストライクを取りに来た甘い球を叩いて走者一掃のツーベースヒットで3点を返す。

「北原、初球狙ってたのか？」

「まあ様子見してくるためにアウトコースにストレート来たらしいなぐらいで待ってたんですけどまさか本当に来てくれるとは思わなかったですね、まあおかげでピッチャーがあんまりしっくり来てないように思い込んでくれたので良かったです」

「おま、そこまで考えてやがったのか」

雷蔵は思わず驚いてしまう。1番バッターに勢いのある者を据えようと考えていた時フリーバッティングで鋭い打球を放っていた翔希を1番に据えたがそこまで考えているとは思っていなかったから

だ。

その後三野が立ち直り打線も試合をひっくり返すことに成功し、6
―5の1点リードの4回表に翔希がマウンドに上がった。

第4試合

4回表にマウンドに上がった翔希は、打者がバッターボックスに入るまでにベンチに手を広げ2・3人ほどのスペースに堂々とくつろぐ雷蔵がいる1度薬師側のベンチを見た。

(あのおっさんがもう一度、俺に野球をするチャンスをくれた。そしてその初陣…練習試合だとしても絶対勝ちたい)

「プレイ！」

「さーて……実戦だとどんなピッチングしやがる？」

雷蔵はベンチにくつろぎながらも翔希のピッチングを楽しみにしていた。

先日紅白戦で投げたとはいえ所詮身内同士でのあくまで練習。

投手として、違うチーム相手に投げる姿を初めて見る。

ゆっくりとワイドアップで頭の上まで上げていた両腕をお腹付近まで下ろすと腰を中心にホームと反対方向に捻り腰の高さまで膝を上げると、足を下ろすと同時に胸を張り鋭く腕を振り抜く。

まるで最初に溜めたエネルギーを全て吐き出すようなフォームから放たれたボールはキャッチャーの渡辺のミットへ収まる。

練習試合が行われたその日の夜、居酒屋で雷蔵はとある人物を待っていた。

「おー轟、待たせたかすまん」

「いや俺も今来たところですよ早川さん」

かつて雷蔵の社会人野球チームでのチームメイト、翔希が所属していた難波シニアの前監督の早川は雷蔵の向かい側に座りビールを注文する。

「どうですかコーチ業は」

「まあ子供に教えてた頃と全く違うような仕事だよ、まあ轟みたいに監督してるわけじゃないしな」

今回都内に早川がいる理由は、難波シニアの監督を退き、かつて雷蔵と共に所属していた社会人野球チームでのコーチをしているためだ。

「まあ細かい話は積もるほどにあるが…どうだった？翔希のピッチングは」

「今日は3イニング投げさせてノーヒットピッチングだったが、何より内容が良かった。コントロールが抜群に良くて打者の反応もよく見ている。高校生のレベルとは思えないピッチャーでした。」

正直、このチームに北原がいてくれて良かったなど、正確には敵に因なくて良かった…ですかね」

「ハハハ！やっぱりそうだったか！」

早川はかつての教え子の活躍ぶりと雷蔵の反応が予想通りだったため大きな声で笑い飛ばした。

「まあ翔希についてはそんな感じか、チームとしてはどうなんだ？ 甲子園狙えそうか？」

「まあ本番は来年以降と考えてます、3年が全員やめちまったので。無名校の割に北原の他に真田ってやつがいいピッチングするし投手はこの2枚つすね。」

野手は俺がみっちり磨けばなんとかなる自身はあります。それに来年は秘密兵器が入ってくるんです」

「まず3年が辞めちまったってどういうことだよ！ ハハハッ！」

その後、野球談義に花を咲かせたふたりは日付が変わるまで盛り上がった。

第5試合

「どうもようこそ来ていただきました。私はこの薬師高校野球部監督の轟雷蔵です」

雷蔵はよろしくお願いいたしますと言いながら自身の名刺を白髪混じりの中年男性に手渡す。

「どうも、よろしくお願いします。落合おちあい 博光ひろみつです。今回はお招きいただきありがとうございます。」

落合は自身の胸ポケットに雷蔵の名刺を入れて軽く会釈をする。

先日、早川と食事をした際に早川から「知り合いで高校野球を専門としている指導者がいるが今現在職を探している知り合いがいる」と聞いたら雷蔵はちょうど技術指導が出来るコーチを探していたこともあり、コーチ就任として依頼をした。

まずは今日は見学をしてその後判断すると言う。

「3年がいなくて2年と1年だけのヒヨっ子のチームですがご指導お願いします。是非気になることがあれば仰ってください」

「ええ、わかりました」

特徴的な顎髭を撫でながら落合はまずは野手の練習を見る。

(打ち勝つ野球を志し、何より試合は選手達のもの。自由にやらせるとお伺いしたが)

早川からある程度、雷蔵の考えなどは聞いており打ち勝つ野球を志すと聞いていた落合だが、目の前で行われているのはバント練習。

(試合で自由にさせる分練習をきっちりこなすように指導している感じだな。意外としつかりした人なんだな轟監督は)

心の中で雷蔵の意外な部分に感心しながら次に向かった先はグラウンドの端のブルペン。

まずは1年の真田の投球から確認する。

「シュート行きますー!」

そう宣言した真田のボールは右バッターの胸元に食い込むシュートを投げ込む。

(球威不足は否めないがいいボールじゃないか。他の変化球にもよるがムービング系統を操れるようになれば3年の時にはある程度まとまったピッチャーになれるな)

次にその隣でピッチングをしている三野に目を向ける。

(どれも平均点レベルだが無名校ということを考えれば妥当なところか。逆に指導者としての腕がなるな。体格がいいから、体の使い方さえ理解してくれば真っ直ぐに力をつけられそうだな)

そして最後に翔希のピッチングを眺める。

(やはりと言うべきか、名門難波シニアのエース級は2人に比べてモノが違うな)

難波シニアのピッチャーがいると伝えられていたものの、部員の名前を認識していない落合。

ただストリートや変化球の質に加えてコントロールも良い翔希にピッチングを見て翔希が難波シニアのピッチャーだと確信した。

(本来であればこのレベルの投手は大阪桐生おおさかきりゆうや他の地区の強豪に引つ張りだころうが、難波シニアで噂されていたことを考えたら余波でこういった無名校にいるんだろうな)

早川が退いてから、お金にまつまる問題やそれまで主力だった選手達が相次いでチームを辞めたりしていた難波シニアに色々な噂は絶えず落合の耳にも入っていた。

(難波シニアのエースがいるのであれば、後の2人でバックアップするような体制をとることが出来れば十分甲子園も狙えるな。あとはこの西東京の強豪達のエース達を打ち崩すことが出来れば…)

そこまで考えていると顎髭を撫でていた落合の右手が止まり落合は心の中で苦笑いをうかべた。

(ふむ、俺は薬師高校でのコーチを引き受けて甲子園に行くつもりになっっているみたいだな)

一通り見学を終えると雷蔵にコーチへの就任依頼を快諾した落合だった。

第7試合

慌ただしい4月が終わり5月に入ると大型連休にさしかかる。

祝日が続くこと、一般の高校で部活動に力を入れているような事がなく広々とグラウンドを使うことが許される薬師高校で連日練習を積み重ねた。

そして大型連休最後の日曜日に練習試合を行うことになった。

その相手は西東京地区の名門青道高校に決まった。

そして練習試合当日になり、薬師高校一同は青道高校のグラウンドへ来ていた。

「おい！翔希か!?翔希やないか！」

青道高校に到着した翔希に青道高校のユニフォームを着た者が声をかける。

「おー！ゾノかひっさしぶりやな！」

難波シニア時代にチームメイトだった前園健太に声をかけられた翔希は薬師のチームメイトに先に行ってもらおうよう伝えて立ち止まる。

「なんやお前、上京しとったんか！」

「いやーごめんごめん！あの時携帯とかスマホもってへんかったし、

チーム辞めてから連絡取る機会なかったからな、ちょっと待ってな」

翔希はカバンからメモ用紙を取りだしてチャットが出来るアプリのIDと電話番号を書くと言った。前園に渡した。

「これ俺の連絡先、また登録しといてや」

「登録しとく！今日スタメンで試合出るけど、翔希は投げるんか!？」

「投げるぜ、しっかしゾノやるな。1年で名門青道の野球部でスタメンなんて、あっそうや東さんおる？挨拶しときたいねんけど」

同じシニアチームの先輩であった東に挨拶すると申し出る翔希に前園は驚いた顔をする、そしてここにはいないと翔希に告げた。

「あれ、お前らに言っただけ。今日は青道さんの2軍と試合って」

1回表の攻撃の前に告げられ雷蔵の言葉に「この監督またやってる」と言ったような諦めのような感情を抱いた。

「1軍の方々が昨日まで遠征に行ってたみたいでよ、今日は2軍のメンバーを出すって言われてたんだよ。まっ、2軍相手なら勝てるだろ、1軍なら難しいがな」

「2軍って言っても青道の2軍ですが、勝てるんですかね」

キャプテンの山内が不安要素を口にする。青道高校は西東京地区で3本の指に入ると言われる強い高校。その青道には全国から猛者

が集まるような高校の2軍相手だ。そんな山内に対して雷蔵は不敵な笑みを浮かべる。

「まあ、大丈夫だ。守りはまだまだだがバッティングは通用すると思うぜ。おい北原」

ネクストバッタースークル付近で投球練習が終わるのを素振りをして待っていた1番バッターの翔希は雷蔵の声に反応し振り向く。

「初球からいけよ、今日も1番バッターらしくとか考えるなよ。お前を1番に置いてる意味分かってるな？」

「OKです。先陣切ってきますよ」

翔希は力強く頷き、バッターボックスへと向かう。

(練習試合で2軍相手とはいえ青道に勝ったという自信をこいつらに植え付けたい、だから頼むぜ北原。全員の不安を吹っ飛ばしてくれよ)

雷蔵はベンチでそう祈りながら翔希の背中を見送った。

第8試合

1番バッターの翔希は素振りを3回し左打席に入る。

「お願いします！」

「うむ、プレイボール！」

薬師高校先行で練習試合が始まった。青道高校の先発、2年生の丹波。

バッテリーを組むのは同じく2年生の宮内。

宮内のサインに頷き、ぶしっ！という独特な声と共にストレートを投げ込む。

「ボール！」

外角低めに投げられたボールは外に外れてボール。

2球目は真ん中やや低めへの縦に割れるカーブが決まりストライク。

翔希はこの2球とも見逃す。

2球目の後審判にタイムを要求しバッティンググローブを付け直す素振りをしつつマウンドの丹波の情報を整理する。

(身長高えから角度あるなあ。スピードもそこそこあるしカーブも落差あって良いピッチャーだな。やけど、コントロールドイマイチな感じかなあ。フォームがシンプルな分タイミングは取りやすい。とりあえずストレート狙ってみるか。球威に負けないようにしっかりと振ろ

う。カーブ来たらごめんなさいで)

3球目に投げられたのはストレート。

外角のやや甘めのコースに来た球を弾き返し1. 2塁間を抜けるライト前へのクリーンヒットになる。

この一打に薬師ベンチが盛り上がる。

2番に入っているのは翔希と同じ1年生の増田篤史。

増田は初球をしつかり転がして翔希が2塁へと進塁。

1アウトランナー2塁で3番の真田。

初球、カーブが引つかかったのかワンバウンドになり宮内がブロッキングするも僅かに一塁側に弾く。

それを見た翔希がその間に3塁へと進む。

青道バッテリーは真つ直ぐ2球を続け真田は2球とも手を出すがファールになる。

(俺がピッチャーならここでカーブを試したい。けど初球のカーブ見ると要求しずらそう。カーブも頭に入れるけどやっぱストレートを狙うか。)

4球目、ストレートに狙いを絞っていたが投げられたのはカーブ。

しかしこれを真田は何とかバットに当てると三遊間を抜けていき先制のタイムリーになる。

「おー真田良く打ったじゃねえか！やっぱセンスあるなあいつ」

「下半身の強さが上手くタメを作れましたね。いいセンスしてますよ彼」

雷蔵と落合はそれぞれ真田を賞賛する。

3 塁ランナーとして返ってきた翔希は4番の山内に耳打ちする。

そのままベンチにかえってきて雷蔵へと丹波の情報を報告する。

「身長高いピッチャーなので角度あります。しかしコントロールが若干甘いところがあるの球種絞って甘いところ目付けすればいいと思います」

「おう、そうかありがとな。まあキャッチボールする前に水分補給だけしろよ」

雷蔵の指示通り水分補給をした後にキャッチボールを行う。

「北原を1番に置いた理由は核弾頭としての役割と情報収集のためだったんですね。轟監督」

「その通りです落合コーチ。あとはうちで1番コンタクト率が高いのと足が速いってのがありますが。ただ本当は3番バッターが最適解です。1番バッターに適任者が現れるといいんですがね」

その後山内らも続き追加点を奪い2-0になり1回の裏、翔希がマウンドに上がる。

第9試合

薬師と青道の練習試合は薬師2点リードのまま4回裏1アウトランナーなしで青道の2番打者、小湊亮介を迎えている。

この回先頭の青道の1番バッターは初球のストレートを打ちセンターフライ。

そして打席の小湊も初球に手を出して一塁線に切れてファールになるも強烈な打球を放つ。

主審から新しいボールを貰うとロジンバックを手に馴染ませながらバッターボックスに戻る小湊を観察しながら小さく息を吐いた。

(2巡目からは流石にファーストストライクから積極的に手を出してくるな)

キャッチャーの渡辺がベンチに座る雷蔵に目を向けると雷蔵は頷く。

序盤はストレートと縦のカーブで組み立てると試合前に作戦として練っており捉えられ始める前に球種を増し狙い球を絞らせないように入っていた。

2球目に選択したのは抜く系統のカーブ。

落合から握り方と親指と人差し指を頂点に捻らず抜くように投げるカーブ。

縦のカーブと違い思い切って腕を触れるためその腕の振りからブレーキの効いたボールが来るため打者は戸惑いやすく今までのカーブとのギャップを感じた打席の小湊はあえなく凡退してしまいこの回も3人で翔希に抑えられてしまった。

「あのカーブは落合さんが?」

ベンチで戦況を見つめていた雷蔵は落合に問う。

「ええ、本人が抜くカーブを投げたいといってたので。最近じゃパワーカーブなど捻ったりするカーブが主流になってきたので希少価

値になりつつあるので来年までにモノになればと思ってましたのであんな完璧に操るとまでは思いませんでした」

実戦まで時間がなかったにも関わらず少しのアドバイスでモノにした翔希に落合は驚きを隠せない様子。

「自分はまだ投手への指導が不慣れなものなので落合さん、よろしくお願いします」

「ええ勿論。指先の器用さや、センスは教えてどうにかなるものではないんでね。これは指導者として色々と教えたくりますね。彼なら10種類以上扱えるだけの器用さもあるので逆に指導に悩みますね」

今後の指導に悩むと同時にどのような投手になるのかと想像しながら好投を続ける翔希を見守っていく。

翔希は5回まで投げて被安打4奪三振6でマウンドを降りると6回から真田が登板。

3イニングで5本の安打を打たれるが犠牲フライによる1点に抑える。

そして最終回には三野が登板し危なげなく3人で抑えて2―1で薬師高校が勝利を収めた。

第10試合

青道高校との練習試合の翌日。

「あっちよつといい？俺野球部の北原って言うんだけど。マネージャー探してて、もう部活入ってたりする？」

「うん。バレー部に入部してるよ」

「あっそうなんや。飯食べてるところ邪魔してごめんね」

昼休み中、翔希はクラス的女子生徒に手当り次第声をかけていた。

事の発端は青道高校との練習試合が終わった後に、2年生達で青道高校のスコアラーをしていたマネージャーが可愛かったという話になつていた時だ。

これまで薬師高校は書ける人で持ち回っていたが明確な担当者がいなかった。

そこでキャプテンの山内が雷蔵へマネージャーを募集したい旨を伝える。

「別に俺は構わないがスコアの付け方をすぐ覚えられてルールわかるやつにやらせろよ」

と至極真つ当なことを言い返された。

女子に野球のルールなどが分かる人など中々いないと感じた山内は目に見えて落ち込んだ。

「ただ、ルールとかスコアの付け方をすぐ覚えられそうな賢い子を見つければいいんじゃないか」

そんな山内の哀れな姿を見た落合が堪らずアドバイスをする。

そして今朝、1日オフのためのんびりと学校に来ていた翔希を校門前で山内が待ち伏せし、翔希にマネージャーを探してくれとお願いされる。

「頼む！翔希、お前特進クラスだろ！頼む！」

必死に頼み込む山内を見て翔希は、拒否すれば自分達のキャプテンが土下座しそうな勢いだったこと。自分達のキャプテンの哀れな姿をこれ以上見たくないという考えに至り渋々引き受けたのだった。

渋々引き受けた翔希だったが女子マネージャーがいてくれたらもちろんいいとは思っていた。

しかし5月になると各々部活に入部している事が多くマネージャー探しは苦戦を強いられる。

断られ続けてさすがにもう無理だなと諦めていたが「部活やっていないって言ってたよ」と教えてくれた事もあり、クリーム色のショートカットの髪型をしている小柄な女の子に声をかけた。

「あつごめん谷内さん？」

昼休みで弁当を食べ終わり、午後に向けた予習をしていたところに声をかけられた。谷地 仁花は翔希に声をかけられ驚く。

（今まで接点のない人に声をかけられてしまった!!!なんて返すのがベスト!?というかこの人名前知ってくれてるのに私は知らないなんて最低だ！社会でやっていけず路頭に迷い…）

と半ばパニックになっていたところ翔希がフォローを入れる。

「あつごめん、自己紹介まだやったね。初めまして、俺は北原翔希。部活は野球部。一応同じクラスやからよろしく」

「谷地仁花です！部活やってません！」

と敬礼している谷地を見て翔希は思わず笑ってしまう。

「そんな力まなくていいよ、てか同い年やし敬語無しでいいよ」

「ごめんなさい、ついクセであと緊張しちゃって。北原くんは関西出身？」

「おーそうそう大阪出身。やからあんま友達おらんねんよ」

「そうなんだ、私も仙台出身だからお互い地方から来てるんだね」

と言ったような話から勧誘している旨など伝えると谷地は一旦見学だけするというような約束を取り付けた。

山内の期待に何とか応えられそうな翔希はホッと安堵した。

第11試合

「ええ、そうです。またトーナメント表などは持って帰りますのでその時に」

7月の初旬、夏の大会まで1ヶ月を切った薬師高校のコーチ落合は夏の甲子園を賭けて戦う西東京地区の抽選会場を後にして監督である雷蔵へと抽選結果を電話で伝え終えたところだ。

(2回戦まではともかく、3回戦で稲実と当たってしまうのか、やつちまったなこりや)

帰り道の電車で落合は顎髭を撫でながら自身のくじ運のなさを嘆いていた。

(だがこの早い段階で強豪とやれる経験値という旨みはあるな。いかんせんうちは来年からが勝負。今年は極端な話死ねる…がそれも1.2回戦を勝ち抜いてからの話だな)

気持ちを切り替えた落合は自身の人脈を活かして、1.2回戦に当たる高校の情報を探り始めた。

その日の練習前、野球部は教室へと集まりトーナメント表が新たにマネージャーになった谷内により配られ監督の雷蔵により説明が始まった。

「1.2回戦はともかく、3回戦はシードのあの稲実になった。まあ今年に関して正直厳しいだろ。なにせうちには3年生がいないからな。ただ、それはメリットでもあって俺達には来年もあるって気持ちで挑めるアドバンテージはあるからな。まあ思いつきでやってくぞ。分かったか？」

はい！という返事が響き渡り続いてホワイトボードを用いながら今後の薬師の方向性の話が雷蔵から続けていく。

「まあここに来た時に言った通り基本的に打ち勝つ野球をしてもら

う。練習試合では展開によってはバントはさせたが公式戦ではさせない。まっ今年の本番じゃねーからな」

そして投手陣は翔希、真田、三野の3人で継投で戦う事が告げられた。公式戦味わえる雰囲気、その中で得れる経験に関して今年は3人で感じるようにという落合と雷蔵の考えだ。

そして背番号発表、エースナンバーの1番は年功序列で三野が背負うことが決められ、真田は3番、翔希は6番となった。

—————

その後の練習、グラウンドの端にあるブルペンではピッチャー3人と捕手の渡辺が落合とミーティングを行っていた。

「さて、大会まで時間が無いわけだがお前らには武器を作って貰う。要するに決め球というやつだ。既存の球種でもいい、新しいものでもいい、これといったボールを1つ作る。それによって迷った時に自信を持って投げ込める。その方がリードもしやすいだろ」

そう渡辺に視線を向けると渡辺は無言で頷く。それを見て改めて投手3人に目を向ける。

「三野と真田は真っ直ぐに力がある。緩急を付けるのもよし、フォークなどで空振りを奪いに行くのもよし、まあ合う合わないはどうしてもあるからな。北原は真っ直ぐを磨け。お前の変化球を活かすのはあくまで真っ直ぐだ。」

その後真田と三野は落合と相談し、真田は今風の球を手元で動かすスタイルを。三野はオールドスタイルを目指すことを決めてそれぞれ練習をこなしていく。

一方の野手陣も打ち勝つ野球を志すためにバットをひたすら振込み練習を重ねる。

そしてあつという間に時が過ぎて夏の大会1回戦を迎える。

第12試合

「稲実」と世間からは呼ばれ、甲子園には春夏13回出場している名門稲城実業高校。

シードにより、西東京地区予選の2回戦からの登場となったが危なげなく12-0のワールド勝ち抜き3回戦の薬師戦を翌日に控えミーティングを行っていた。

「薬師はベンチからもよく声が出ており全員が伸び伸びと野球をやっている印象を受けました。2試合で17得点していますが犠打は0でした。バントはしてこない分ファーストストライクからしっかりと振ってきます。」

ピッチャーですがエースナンバーは2年生の三野が背負っていますが1年の背番号3の真田と背番号6の北原の計3名が登板しています」

薬師の試合の映像を流しながら偵察隊が薬師に関して説明を終えると監督の国友広重が全体を見渡す。

「勝てばベスト16だが目の前の試合に集中しろ。バッテリーは安易にストライクを取りに行くことがないように。ピッチャーの持ち球の把握をしておけ。誰が投げて来てもいいように情報だけ頭に入れておけ」

「「はーん!!」」

「1番の北原が9打数6安打で振れている。2試合とも1回の先頭打者で初球を叩いて出塁して得点に絡んでるからまずはこいつを出さ

ない…って聞いているのか鳴」

「ふああー、聞いているよ雅さん」

「あくびしてる奴が人の話を聞いてるとは思えん、2試合で17得点。相手には2回勝ったという勢いがある」

バッテリー間での打ち合わせ中に稲実の2年生正捕手の原田雅功が1年生投手の成宮鳴を咎める。

成宮は1年生ながら強豪稲実で1年生で唯一ベンチ入りする実力者。監督の国友は来年で降を見据えて先発を経験させることを決めて、明日の薬師戦で先発の予定だ。

「所詮1. 2回戦の弱小校の投手を打ってるだけでしょ。大丈夫…ってあれ？雅さんリモコン！」

原田は咄嗟にリモコンを差し出すと成宮はそれまで興味を示さなかった薬師のビデオを巻き戻し翔希の打席を最初から映し出しそれをじつと見る。

「どうした鳴？」

「なんかこいつ見た事ある…気がする…あーっ！こいつリトルでヒット3本打ったやつだ！こいつ全然空振りしないんだよ！」

「鳴の球をか…それは警戒が必要だな」

原田はこの春入学してきた成宮の球を受けた時に変化球を捕球どころか、後ろへ何度も逸らしている。

成宮が調子に乗ることが目に見えてる原田は口に出して褒めることはないが今まで見た中でナンバーワンのピッチャーだと思っている。

そんな成宮から3本ヒットを打っている翔希を警戒せざるを得ない。

それからやる気を出した成宮は原田と入念に薬師の打者のビデオをチェックし打ち合わせを続けていった。

一方の薬師高校も稲場のビデオを見てミーティングを行っていた。

「はつきりいって今年の稲実は優勝候補だ。それも甲子園のだ。全員が何をすべきか分かっている打線、そして充実した投手陣。今年のお前らじゃまあ無理だ」

監督の雷蔵はそう言い切る。

薬師の選手全員も映し出されている稲実の映像を見て稲実の強さを目に見ている。

「勝負の世界は何かが起きるとは言う。否定はしないがここまで圧倒的だと間違いも起きねえだろ。だがタダで負けるな。負けの中になにか拾え。ピッチャー陣は今の自分がどれだけ通用するか思い切つて勝負してこい。他の奴らも打席でフルスイング貫いてこい。勝負は来年だ。だから今年は強い奴らとの勝負をとことん楽しめ！」

雷蔵がそう発破をかけると選手達は元気よく返事をした。

第13試合

『薬師高校のシフトの変更をお知らせ致します。ショートは北原くんがピッチャー。ピッチャーの真田くんがレフト、レフトの米原くんがショートに回ります』

西東京地区の3回戦。稲実と薬師の試合は5回の表まで進み8-0と稲実がリードしている。

薬師の先発三野が初回到り打者一巡の猛攻で5失点し更に指のダメージを潰してしまい初回でマウンドを降りてしまう。

2回からは急遽マウンドへ真田が上がったが2回の表に2失点してしまう。

3回と4回は持ち直したものの、5回の表に稲実打線に捕まり1点を失いなおも2アウト満塁のピンチを招いた所で翔希をマウンドへ送った。

翔希の投球練習が終わり、打席には4番の原田が入る。

(8点差。この先も戦いが続く。少しでも投手陣を休ませたい)

打席に入る前に原田はスコアボードに目をやりコールドゲームについて考える。

7回で7点差以上であればコールドゲーム成立となるが、原田は暑さがさらに増すこと、試合間隔が短くなることを踏まえて5回で10点差をつけて5回コールドで終わらし、出来る限り投手陣を休ませたいと考えていた。

（北原の持ち球はチェンジアップと2種類のカーブ。ビデオを見た限りストライク先行でコントロールは良さそうだな。ツーアウトだから大きい当たりは必要ない。2塁ランナーを返して5回でこの試合を終わらす）

そう考えた原田はコンパクトな打撃を意識し握りこぶし1つ分短くバットを持ち打席へと立った。

初球はインローいっぱいストレート。

コースが良かったため原田は手が出ず見逃してストライク。

2球目も同じようなコースへストレート。

原田はこれを予想しておらずまたしても見逃して2ストライク。

2球インローが続いたため原田の思考は外の変化球で勝負をしてくると想定する。

翔希が長くボールを持ち原田が間を嫌いタイムを取ろうしたその瞬間、それまでのゆったりとしたフォームではなくクイックモーションでボールが投げ込まれる。

（インコース……！）

原田は突然のクイックモーションでの投球に加えて、予想していないコースのボールに反応出来ず見逃す。

「……ボール！」

渡辺のミットへと収まり球審の手が上がりかけるも、一瞬の間を置いてボールの判定。

(これが1年生の投球術とは思えん…)

原田は内心ストライクだと思っていたため助かったと胸を撫で下ろす。

そして4球目のボール球のカーブを見送り5球目のカーブを叩き左中間へ走者一掃のタイムリーツーベースを放った。

その後も翔希も稲実打線を止められず失点を重ねてしまう。

5回の裏の薬師の攻撃も成宮に抑えられ、薬師高校の夏は0―13と惨敗に終わった。